

本を3冊読めば大学教授になれる

「真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。」 小野しまと

☆ ☆ ☆

ウソと言うかも知れない。だが、これは本当の話なのだ。哲学書を3冊読めば、東大教授にだってなれる。

私自身は、東大の教授にも京大の教授にもしてもらえなかったが、私の知人の中には、こんなのがゴロゴロいるので、断言はできる。

もっとも、ここでちょっと断っておきたいのは、私が「教授」と言ったのは、話を分かりやすくするために、厳密に言えば「教員」ということになる。

教員のうちには助手・講師・助教授・教授が全部含まれる。

だから、教員にはなれても、教授の地位にまで行くのはたいへんだ、たった3冊の読書では済まないはずだ、と人は言うかも知れない。

だが、他の学科のことは知らないが、哲学系や思想系の学科では、助手は別としても、講師、助教授、教授は、学問的にはまったく差がないのだ。

それぞれの大学で年数に違いはあるが、講師を何年やれば助教授、助教授を何年やれば教授というように、年数で昇格の順番が回ってくる。

昇格の審査の時には、一定の論文数が要求されるが、数さえ満たしていれば、よほどのことでも無いかぎり、文句は言われない。

たいていは学内審査だから、論文の内容を正しく判定できる人などいないのが普通だ。

というのも、哲学の教員は、講師であろうが助教授であろうが、教授と同じように一国一城のあるじであって、非常に独立性の強い学問だからだ。

古代哲学の先生が中世哲学の先生の論文を読むことはできる。しかし、研究業績の深いところまではとうてい入っていけない。

そして、今どき、専門が同じ教員を二人も雇っておける大学なんて滅多にない。

だから、たいてい、論文数がそこそこにあれば、あとは儀式めいた審査で終わってしまう。

私はいま、研究業績の深いところという言い方をした。

たった3冊の本を読んで、そんな深いところまで入っていけるのか、と不思議に思う人がいるかも知れないが、そのことについてはもう少し先で話そう。

今は、次のことだけを頭に入れておいてほしい。深いということは、広いということとは違うのだ、と。

私は、最近、わらし仙人という人物の書いた『30倍速読術』という本を読んで、いろいろと教えられることがあった。

わらし仙人は、学生時代に3万冊の本を読んで、IT時代のヒーローになった。私は、学生時代

に3冊の哲学書を読んで、大学教授になった。

この違いはいったいどこから来たのだろうか。

時代や環境の違いなど、あれこれ考えてみたのだが、読書の方法に絞って言えば、私はどうやら、「速読術」に対して、或る種の「遅読術」を用いていたらしい。

この「速読術」と「遅読術」の違いについては、いずれ細かく分析してみようと思っている。

とにかく、学生時代の私は、速読・多読型というよりも、むしろ遅読・少読型であった。

むしろ、と言ったのは、小説のたぐいはアツというまに読んでしまったからである。といって、多読するほうではなかった。

私の級友にもそんな男が一人いた。彼の言葉には天才的な閃きがあって、いつも驚かされたものである。

ロールシャッハ・テストの黒い模様がすべて、熊が相撲を取っているように見えると言っていたから、精神状態が常人とは異なっていたのかも知れない。

彼は、図書館のテーブルを一つ占拠して、そこを自分の書齋代わりにしていた。

テーブルに図書館の本や自分の本をコの字形に積み上げ、高さ四、五十センチの壁を作っていた。

図書館の開門と同時にそこへやって来て、閉館までコの字形の壁に隠れて何かしているのだ。

時々授業に出るためにそこを離れる。授業が終わるとまたすぐに戻ってきて、夜までそこにいる。帰る時は、テーブルはそのままの状態、読みかけの本を開いたままで、出ていくのだ。

そのうち、彼は炊事道具や衣服類までそこに持ち込むようになった。

これに困り果てた図書館員が、テーブルを空けるように言っても、彼は頑としてゆうことを聞かなかった。

図書館員は哲学科の教授に頼んで、ようやく彼をそこから撤去させたのである。

この男は、大学院終了後、東北の大学に助教授として赴任した。いっきよに助教授というのはたいへんなことだった。

一年ぐらいいそこにもいたのだろうか。彼は突然勤めを辞め、インドへ行ってしまった。それ以後、杳としてこの男の消息を聞かない。

私の知るかぎり、彼は数冊のソクラテスものしか読んでいなかった。いつ行っても、ギリシャ語の辞書を横に置いて、プラトンの原文を読んでいた。

さかんにノートは取っていたが、読んでる場所はほとんど進んでいなかった。コの字形に積み上げたたくさんの本は、たぶんソンドクだったのに違いない。

彼が私に喋ったことも、「ソクラテスの弁明」や「クリトン」のことばかりだったように思う。

哲学書を3冊読めば大学教授になれる、というテーマの証人になってもらえればと思ったのだが、残念ながら今は行方不明だ。

当時のことをこれ以上聞き出すことはできない。

他にも証人にしたい人間はいるのだが、そういうことをあまり言われたくない立場の連中ばかりだ。そこで、やむを得ない。私自身のことを話すことにしよう。

今言ったソクラテスマニアの男は、大学院を出ていきなり助教授になった。私のスタートは助手だった。

哲学を初めて教えるようになったこの瞬間を、教授職の出発点とするならば、私は哲学書を3冊読んだだけで、大学教授へのスタートを切った。

一冊目は、ヤスパースの『哲学入門』（草薙正夫訳）だった。私が生まれて初めて、最後まで読み通した哲学書だった。

それまで、図書館にあった何冊かの入門書を手にとったことはあったのだが、すべて最初の数頁で読むのがイヤになってしまった。

哲学が面白いと思ったのは、このヤスパースのものが初めてだった。

何度読み返したか分からない。いつもポケットに入れていて、通学電車の往復路で、読みたいなと思った時に取り出しては、好きな場所を読むのだ。

学友と飲み歩く時もポケットに入っていた。すっかり哲学づいていた私は、理屈っぽいことばかり言って同席の人間やホステス、バーテンたちを困らせていた。

話がこんがらがったり、支離滅裂になった時の最後の決め手が、この本を出して見せることだった。

当時、私は、大学の近くのお医者さんの家で、フランス語の家庭教師をやっていた。

暁星学園へ行っている子供に私がフランス語を教える間、奥さんはお茶の先生を相手に、茶道の練習をしているのだ。

或る日、たまたま、そのお茶の先生と一緒に医院を辞することになった。

二人で近くの駅まで歩いていったのだが、ほとんど何も喋らず、ただ黙々と、並んで歩を進めた。私よりかなり年上のオジサンで、いつも和服を着ていた。

電車の中では、隣り合わせに坐り、数回言葉を交わしただけで、あとは互いにだんまりを続けていた。

私は、別に読もうと思ったわけではないのだが、例の哲学入門をポケットから取り出していた。

表紙裏や空いてる頁にはいろいろ書き込みがしてあって、まるでメモ帳のようになっていた。多分その時は、何かをメモしておこうとでも思ったのにながらもない。

その、書き込みでいっぱいになっていた初代哲学入門は、どこかで紛失してしまった。本当に残念だと思う。

何しろ、私の、哲学に対する初めての熱気や素朴な問いが、そこにギッシリ詰まっていたのだから。

突然、お茶の先生が私に語りかけてきた。

「君もその本が好きなのか」と言って、今まで見せたこともないような笑顔を私に向けてきたのだ。

「私もその本は何度読んだか分からないよ」

そう言って目を輝かせたお茶の先生は、まるで別人のようになって、とうとうと喋り始めたのだ。シロウト同士の哲学談義ほど面白いものはない。哲学科の学生同士になると、もう、ちょっとし

た気取りやポーズが入ってしまうのだ。

「そんなこと言われなくたって、とっくに分かってるよ」といった顔を始める。

だが、そういう虚飾の無い、素朴な哲学ファン同士の話は、ありとあらゆるテーマや発想に、自由に、無限に飛んでいくのだ。

ヤスパースの本には、かなり固くなるしい専門用語も使われているのだが、そういうものを解きほぐして、日常生活のレベルで理解する必要がある。

それには、哲学の知識などほとんど持たない者同士が、勝手気ままに自分たちの言葉をぶつけ合って話し合うのに越したことはない。

「ヤスパースの『包括者』とは、いったいどういうことなんだ」

「包むというからには、中と外があるんだろ。包み紙の外に何も無かったらどうなるんだ」といった話が延々と続くのだ。

「『包括者』と言ったって、この『者』は人間ではないんだろ」とお茶の先生。

「あれは神のようなものなんですよ」と私。

「じゃあ、神は包みガミなのか」といった具合である。

その日、私たちが交わした最後の話は、確か、なぜ男と女などというものがこの世にいるのか、ということだったと思う。

「私は女房という時にふとそんなことを考えてしまうんだ」と、お茶の先生が言ったあたりで、私たちは、降りる駅を乗り越してしまったことに気がついたのだ。

私がブログを始めたのは、こういう楽しさを思い出したからだとも言える。

この先生が今もお健在で、インターネットでもやっているなら、またきっと声をかけてくれるだろう。

そして、哲学ファン同士の楽しいシロウト談義をまた始めるのだ。

哲学入門に次いで必要なのは哲学の歴史だった。世界にはどんな哲学者がいて、どんなことを教えていたのかということを知る必要があった。

そこで、手に入れたのがシュヴェーグラの『西洋哲学史』（谷川徹三・松村一人訳）である。

これは、哲学科の先生が勧めていた本だった。これまでに全巻読了した哲学史はこれだけだ。

学生時代には、これ以外にもいろんな哲学史を買ったが、ほとんど読まなかった。今も本棚に並んでいるものもあるし、古本屋へ行ってしまったものもある。

こうして、哲学を学ぶための基本的な読書として、哲学入門と哲学史を一つずつ選び、遅読・速読を交えて何度も読み返した。

それも日本語訳で読み、それ以上のものを求めなかったことは、今にして思えば方法として間違っていたとは言える。

哲学入門は、何と言っても、哲学をますます好きにし、哲学への意欲を高めるためのものであり、いわば食欲を高めるためのアペリティフのようなものである。

肝心の食事には手をつけず、アペリティフばかり飲んでいたらどうなるであろう。

食事の前に悪酔いしてしまうのは目に見えている。こんなのは一冊読めば充分なのだ。

ただ、その一冊を繰り返して読む必要はある。自分がこれから入っていこうとする門を、はっきり見定めておく必要があるからだ。

哲学史は一種の見取り図であって、これもたくさん読む必要はない。良いものを一冊読めば充分だ。

地図ばかり見ていると始まらないからである。途中で地図が必要になった時は、もう一度開いてみて、必要な個所を読めばよい。

あとは、自分がこれだと思った哲学者の思想に直接入っていくことである。まずは一人の哲学者の思考を忠実に辿るほうがよい。あちこち浮気をしないことである。

誰を選ぶかということで、ちょっとしたノウハウはあるけれど、このことについては、また別の個所でゆっくり話そう。

私自身は、フランスの哲学者デカルトを選んだ。彼の著書『方法序説』を今度はフランス語の原文で読み始めたのである。

この場合はどうしても、本人の書いたものを直接読む必要がある。翻訳にはほとんどない間違いが紛れ込んでることが多いからだ。

それに翻訳者のレベルも問題だ。翻訳者の理解は、ひょっとすると君より程度が低いかも知れないのだ。

もちろん、先人の仕事をバカにしろと言うわけではない。日本語訳も傍らに置いて、時々目を通すことも重要である。教えられることも多々ある。

しかし、本命は、哲学者自身が自分の言葉で書いたものであることを忘れてはならない。

フランス語原文で読む場合に必要となる道具は、まず何よりも、仏和辞典である。仏仏辞典も用意しておけば申し分ない。

それと同時に必要になるのは、哲学辞典である。私は、『岩波小辞典・哲学』を座右の書としていた。226頁ほどの薄っぺらな本である。

この他に、フランス語で書かれたアンドレ・ラランドの哲学辞典も愛用した。これは、ヤスパースが哲学入門の中で推薦していた本だ。

これだけの道具を揃えて、私は、デカルトの『方法序説』を辞書を引き引き読み始めた。

そして、大学の助手になり、哲学を教える立場になるまでに完全に読了したのは、この本だけだ。

この本だけは何度も読んだ。そして論文を書いた。

『方法序説』の他にデカルトの著書としては『省察』を読んだが、これは正直言うと前半だけだった。

大学の演習でこの本をテキストにしていたので、その機会に便乗したわけだ。

哲学科の授業を受けたことのある人ならよく知っていると思うが、演習や講読で一回に読む量は、せいぜい二、三頁である。

だから、一年間でだいたい二、三十頁の原文を読むわけだが、私がこうして部分的に読んだ本を挙げると、かなりの数になる。

カントの『純粹理性批判』、
ヘーゲルの『精神現象学』と『論理学』、
ライプニッツの『形而上学序説』、
ハイデッガーの『有と時』、
サルトルの『存在と無』である。

これらの本は、いずれも二、三十頁ぐらいつつ学生時代に読んだわけだが、結局、それで終わりだった。原文の厚さから見ると、鼻くそぐらいのものである。

ライプニッツの『形而上学序説』は、その後、教職に就いてから読了したが、他の本はほとんど手を付けていない。

結局、私は、実質的には、
ヤスパースの『哲学入門』（日本語訳）、
シュヴェーグラーの『西洋哲学史』（日本語訳）、
デカルトの『方法序説』（フランス語）
の合計3冊を読んで、一生の仕事を手に入れたことになる。

すでに述べた、わらし仙人の速読術、多読術に対比して言うならば、私がやってきたことは、「遅読術」であり、少読術である。

この点では、わらし仙人とはまったく生きる世界が異なるのかと思っていたのである。「だが、待てよ」と或る時、私は思い直すことがあった。

カントやヘーゲル、ハイデッガーやサルトルの本の大部分はまだ読んでいないが、今でもそれらの頁をパラパラとめくって眺めていることがある。

私が読んだわずかな部分については、論文の中で触れたこともあるし、サルトルの『存在と無』の序文を、私自身の演習のテキストとして使ったこともある。

私は、この本の全体をまだ読み終わっていないが、もう何もかも判っているという気にさえなるのだ。

カントやヘーゲルやハイデッガーについても同じだ。
彼らの考え方はもうだいたい判っているし、これ以上あまり知ろうとも思わない。だからこそ、その後読まないで放ってあるのだ。

こういうことから、私はふと考えたのである。
もしかすると、私は、わらし仙人の教えるような速読術によって、これらの本のほとんどを、知らず知らずのうちに全て読んでしまったのではないだろうか、と。

わらし仙人の速読術の最終奥義は、「ほとんど読まずして読む」ことにあるという（上掲書 116頁）。

読まずして読む、この禅的な極意によれば、仙人の速読術と私の遅読術はどこかで結びつくのではないだろうか。

☆ ☆ ☆

「本を3冊読めば大学教授になれる」というテーマは、あらゆる教授職に通ずるものではないかも知れない。

しかし、哲学系・思想系はもちろん、経済系、法律系、歴史系にも応用は利くし、場合によっては、他の学科にも使える方法だと思う。

私が学生の頃は、サミュエルソンを一冊読めば経済学者になれると言われていたし、ファイアマンを数巻読めば物理学者になれると言われていた。

そのほか、日本の学者の名前もあげられ、憲法だったら宮沢俊義、国際法だったら横田喜三郎のものを読めばよい、などとも言われていた。

或るアメリカ映画の中で、医学部の教授が分厚い一冊の本を学生たちに放り投げ、お前たちこれを読めばいっばしの医者になれるぞと言う場面があった。

私は、他の学科のことはよく知らないので細かいことまでは言えないが、遅読・少読型の読書術は、あらゆる分野で必ずや役に立つに違いないと思っている。

[2006/11/21 magmag]